

## 国際バカロレア Q&A

### Q 1 国際バカロレア (IB) とは、何のことですか。

A スイスのジュネーブに本部がある国際バカロレア機構 (IBO) が提供する教育プログラムのことです。ディプロマ・プログラム (DP) を履修し、最終試験に合格すると、国際的に通用する大学入学資格 (国際バカロレア ディプロマ 資格) が授与されます。(▶ 第1章①)

### Q 2 IBには、どんなプログラムがありますか。

A 3歳から12歳を対象としたプライマリー・イヤーズ・プログラム (PYP)、11歳から16歳を対象としたミドル・イヤーズ・プログラム (MYP)、16歳から19歳を対象としたディプロマ・プログラム (DP)、16歳から19歳を対象としたキャリア関連プログラム (CP) の四つの教育プログラムがあります。本書では、DPを中心に紹介します。

(▶ 第1章①、MYP：第1章②、第3章④)

### Q 3 IB教育は、どこで学べますか。

A 国内ではインターナショナル・スクールを含め、2017年6月24日現在、46校がCP以外のいずれかのプログラムを実施しています。そのうち、20校がいわゆる1条校です。(▶ 第1章①)

### Q 4 IB教育を受けるメリットには何がありますか。

A 国際バカロレア資格の取得だけでなく、色々なメリットがあります。特に、グローバル化が進み、多くの情報に囲まれて生活している現代において、知識は日々更新されていきます。大切なのは知識を学ぶことではなく、自らが多面的に考え、課題を解決していける能力を身につけることです。IB教育では、そのような力を育くむことに力を入れています。

(▶ コラム①、座談会)

### Q 5 そもそも IB教育と日本の学校教育は何が違うのでしょうか。

A 目指している方向性は同じです。「IBの使命」や「IBの学習者像」が重視する国際的な視野をもった人材の育成や「探究する人」「コミュニケーションできる人」「思いやりのある人」といったことは、日本の教育でも重視されています。特に、今後、順次実施される新学習指導要領の内容はIB教育と近いものになっています。(▶ 第1章①、コラム③)

### Q 6 DPでは、どのような科目を勉強しますか。

A DPには「言語と文学」「言語習得」「個人と社会」「理科」「数学」「芸術」の6グループがあり、各グループから1科目ずつ、6科目を履修することになります。また、6科目のうち、3~4科目を上級レベル (HL、各240時間) で、残りを標準レベル (SL、各150時間) で履修します。また、その他にも、「知の理論 (TOK)」、「創造性・活動・奉仕 (CAS)」、「課題論文 (EE)」がコア科目として必修となっています。

(▶ 第1章①、TOK：第1章③、CAS：第1章④)

### Q 7 「言語 A」とは何ですか。

A 「言語 A」とは母語に相当する言語のことで、すなわち国語教育です。DPの6グループのうち「言語と文学」に属する「文学」「言語と文学」「文学とパフォーマンス」のいずれかを学習します。日本語が母語であれば、日本語の「言語 A」を選択します。「言語 A」に対して、日本語の「言語 B」とは「外国語」としての日本語教育を指し、「言語習得」に含まれます。

(▶ 第1章①、「文学」：第2章①~④、第3章①②、「言語と文学」：第3章③)

### Q 8 IBには、検定教科書のようなものがありますか。

A ありません。ただ、教科ごとに『指導の手引き』『教師用参考資料』などがあり、カリキュラムを作成する際、教師は必ずこれらを参照しなければなりません。また、DPの「言語 A」の場合、『指定作家リスト (PLA)』『指定翻訳作品リスト (PLT)』があり、担当教師はそこから授業で扱う作家・作品を選ばなければなりません。(▶ 第1章①、コラム②、資料編①②)

第2章では、「言語 A：文学」の授業づくりについて紹介しています。本章に入るまえに、「言語 A：文学」の概要を確認してみましょう。

### 1. 「言語 A：文学」について

「言語 A：文学」は、ディプロマ・プログラム(DP)の科目です。DPには「言語 A：言語と文学」(▶第3章③参照)、「文学とパフォーマンス」という科目もありますが、日本の学校では「文学」が選択されることが多いようです。

また、「言語 A：文学」には、難易度、時間数の異なる、標準レベル(SL)／上級レベル(HL)の二つのクラスがありますが、どちらも、下の表にあるような、パート1～4の内容を学ぶこととなります。「指定作家リスト(PLA)」「指定翻訳作品リスト(PLT)」(▶資料編①②参照)というリストから、作家・作品を選び、基本的には、各作品を通読することを通して、授業を行います。本章でも、このパート構成に沿って、授業づくりの様子や留意点を紹介します。

#### ▼「言語 A：文学」シラバス

| シラバスの構成   | 授業時間数 |    |
|---|-------|----|
|   | SL    | HL |
| <b>パート1：翻訳作品</b><br>(SL)：2作品／(HL)：3作品<br>全作品を「指定翻訳作品リスト」(PLT)から選択する。                                | 40    | 65 |
| <b>パート2：精読学習</b><br>(SL)：2作品／(HL)：3作品<br>全作品を「言語 A」の「指定作家リスト」(PLA)から選択する。作品は、それぞれ異なるジャンルから1つずつ選択する。 | 40    | 65 |
| <b>パート3：ジャンル別学習</b><br>(SL)：3作品／(HL)：4作品<br>全作品を「言語 A」の「指定作家リスト」(PLA)から選択する。作品は、すべて同じジャンルから選択する。    | 40    | 65 |
| <b>パート4：自由選択</b><br>(SL)：3作品／(HL)：3作品<br>どのような組み合わせでもよい。作品を任意に選択する。                                 | 30    | 45 |

### 2. 「言語 A：文学」の評価について

「言語 A：文学」の評価は、大きく「外部評価」と「内部評価」に分かれています。概要を以下の表に示します。なお、下の表は HL のものですが、SL についても、項目や配点はおおむね同様です。

先述の各パートは、この評価と密接にかかわっており、これを一つの目標として授業が行われます。より詳しい評価の内容については「資料編」もご参照ください。

#### ▼「言語 A：文学(HL)」評価

| 評価の構成  | 配点                              |
|--|---------------------------------|
| <b>【外部評価】(4時間)</b><br><b>筆記試験 試験問題1：文学論評(2時間)</b><br>・2つの課題文(散文と詩歌の抜粋)で構成。<br>・生徒は1つを選択し、論評を書く。(20点)<br><b>筆記試験 試験問題2：小論文(2時間)</b><br>・出題は、各ジャンルにつき1問、計3問。<br>・生徒は、このうちの1問につき生徒は「パート3：ジャンル別学習」で学習した少なくとも2作品に関する小論文を書く。(25点)<br><b>記述課題</b><br>・「パート1：翻訳作品」で学んだ1つの作品に関する「振り返りの記述」と小論文。(25点)<br>・「振り返りの記述」は、必ず300～400語(日本語の場合は600～800字)でなければならない。<br>・小論文は、必ず1200～1500語(日本語の場合は2400～3000字)でなければならない。 | <b>70%</b><br>20%<br>25%<br>25% |
| <b>【内部評価】</b><br>以下はコース修了時に学校内の担当教師による内部評価を実施した後、IBによる外部モデレーション(評価の適正化)を行う。<br><b>個人口述コメントリーおよびディスカッション(20分)</b><br>・「パート2：精読学習」で学習した詩に関するきちんとした形式の口頭の論評と質疑応答(10分)、その後、パート2で学習した残る2作品のうちの1つの作品に基づくディスカッション(10分)を行う。(30点)<br><b>個人口述プレゼンテーション(10～15分)</b><br>・「パート4：自由選択」で学習した作品に基づくプレゼンテーションで、内部評価の後、内部評価課題のパート2を通じて IB による外部モデレーション(評価の適正化)を行う。(30点)  | <b>30%</b><br>15%<br>15%        |

## 「言語 A：文学」の定番教材とは？

中学校や高等学校の国語教科書には、「定番教材」と呼ばれている作品があります。中学校だと、ヘルマン・ヘッセ『少年の日の思い出』(1年)、太宰治『走れメロス』(2年)、魯迅『故郷』(3年)などが挙げられます。これらの作品は採択の歴史も長く、世代を超えて日本中で読み継がれています。こうした傾向は高等学校でも同じで、芥川龍之介『羅生門』、志賀直哉『城の崎にて』、太宰治『富嶽百景』、中島敦『山月記』、夏目漱石『こころ』、森鷗外『舞姫』などの定番教材があります。

では、「言語 A：文学」の場合はどうでしょうか。「言語 A：文学」には、いわゆる教科書のようなものはありません。国際バカロレア機構(IBC)が発行している「指定作家リスト(PLA)」と「指定翻訳作品リスト(PLT)」(▶資料編①②参照)の中から、学校ごとに作家と作品を選択し、カリキュラムを構成します。「言語 A：文学」の作品選びは、とても柔軟なのです。とはいえ、実はパートごとに採択率の高い作品があるようです。

「翻訳作品」であれば、シェークスピア『マクベス』、カミュ『異邦人』、チェーホフ『桜の園』、カフカ『変身』、イプセン『人形の家』が人気です。「精読作品」や「ジャンル別学習」の場合は、夏目漱石『こころ』、安部公房『砂の女』や『友達・棒になった男』、太宰治『斜陽』や『人間失格』、遠藤周作『沈黙』、三島由紀夫『金閣寺』や『近代能楽集』、有吉佐和子『華岡青洲の妻』、吉本ばなな『キッチン』などが定番教材といえます。詩人では、高村光太郎、萩原朔太郎、谷川俊太郎の人气が高いです。

DPの場合、240時間(SLの場合は、150時間)の中で扱える作品数には限りがあり、しかも生徒たちは丸ごと1冊を読んで、深く思考しなければなりません。教師は、入手可能で、解釈の切り口が豊富で、各パートの評価規準と作品の魅力が合致するようなテキストを選ぶ必要があります。定番教材は、このような条件に合致した作品だと言えるでしょう。

逆に、PLAには、国語教科書では定番の葉山嘉樹(『セメント樽の中の手紙』)や正岡子規、高浜虚子の名前が見当たりません。「指定作家リスト」は、近々改訂されるそうで、どのような作家が新たに加わるか楽しみです。